

風

韻

第 4 号

(1963年度)

神 戸 大 学 風 韻 会



「屋島」 宇治正夫師範
 (1962年11月4日 独演三番能 於 大槻能楽堂)

風韻 第4号 目次

私の念願	師範 宇治正夫	1
私の留学生活と謡	副会長 荒川祐吉	3
随想—御節介と親切—	36年卒 原敏郎	5
能とエロチシズム	37年卒 永田守男	6

「誌上研究室」

能・古典芸能・現代	E 12 大良晃彦	8
-----------	-----------	---

プロフィール「風韻会」

共同研究	サークル論を中心として	14
------	-------------	----

風韻会合宿考	E 13 黒田昌吾	17
--------	-----------	----

〆狸々〆 開店の記	J 12 山本正人	19
-----------	-----------	----

能楽における叙述成分	B 13 戸次威左武	23
------------	------------	----

謡曲史跡めぐり(二) 大和路	E 13 段野治雄	24
----------------	-----------	----

「走馬燈」思い出の記		27
------------	--	----

有田栄一・大良晃彦・小林敬三・久世武夫・松尾敏弘・佐々木肇宏
 山本正人

昭和38年度風韻会活動総括		35
---------------	--	----

神戸大学風韻会々員名簿		38
-------------	--	----

編集後記		51
------	--	----

表紙題字は宇治師範筆



11 回 生 歡 送 謠 会 (1963年 3月24日 於 学生集会所)



摩耶山天上寺夏期合宿 (1963年 8月26日— 9月 1日)

私の念願

師範 宇治 正夫

近頃私鉄のストがある度に気がつくのですが、以前には御乗客とか各位とか書いてあった文字が、だんだんと變つて利用者の皆さんと書くようになってきました。時代の變遷とはいえ、何故乗客を利用者と變えねばならぬのか、そんなものの考え方には、私にはどうも腑におちないものを感じられます。同じ人間同志なのですから、その立場立場でお互いに相手を尊敬し大切にすることで幾分でも世の中が住み良くなるのではないのでしょうか。自分の家を訪問される人は、よしこちらには迷惑を感じる用件で来られた人であろうとも、一応お客さまとして接する事に少しも不都合なこととはないと考えてはいけなんでしょうか。私は突然の訪問者のあつた時は、たとえ家の中がひっそりかえっている時でも、「やあどうも。さあどうぞ。」と平気で客を招き入れる。家内は少し片付けてから入って頂いたらというのですが、よく来られたと迎える人ならば、どんなに散らかされた中でもすぐ招き入れた方が、どちらにも気楽なのではないでしょうか。全てありのままの姿が尊いのではないのでしょうか。

世はあげて物質的になつてきている今日ですが、今朝ラジオを聞いていましたら、「戦時中、薪木がなかったのですが、家の近所に菩提樹が沢山あつたので、その落葉を捨てて御飯を炊いたり、菊の茎を干しておいて炬に燻べたりしました。物が不自由なためにまるで王侯の生活ともいえる豊かな氣持を味わつたものですが、最近では物が出来す

きて本当に貧しい暮しになった。」と、洛北に住むある芸能家が述懐しておられるのを聞き、こんな気持は億方長者にはわからんだろうと、ちょっと子供の力むような快さを覚えしました。私など、謡の中であるが、日常王候ともなり、天狗ともなり、また歌の名人になっても童神の感応を受けたりして、あらゆる夢の世界を想定表現して現実を離れることに没頭している時間の方が多いため、どんな苦しい時でも一般人には解らぬ豊かさをもち、苦しさや悲しさから逃げこめる場を持つておる次第であります。よって健康であり、健康であれば少しでも人の為にも出来ることはつくしたいというような気持になることも出来ます。私の信頼し尊敬する人、広く云えば世の中の為になる人には出来るだけ長生きして健康であっていただきたいと思えます。また、長生きして貰いたい有為の青年が夭逝される事等は本当に悲しいことです。花でも良種のもは弱くて、つまらぬ花は強く繁殖力も盛んである如く、良い人にどうも弱く健康を害しやすい人が多いのは悲しいことです。どうです、毎日十分づつでも夢の世界に入って見る気はありませんか。

昨年、風韻会四十五周年と年を同じうして神戸大学風韻会の三十周年を迎え、皆様から御芳志御配慮を頂いたことが大きな動機となって、庭先に舞台を建設中であります。これは稽古される人の成果を高める為のものであります。舞台は二間半四方のかなり気持の良いものですが、橋懸りは旧住居を利用して、小さいながらも気分の味わえるように設計致しました。各方面に指導的立場にたつて寸刻のない方々が、時々、一風変わった、台所から天人が現われるというような、また菩提樹の落葉を焚いて王候の気持を味わうような一時をもって頂くよう、心おきなく御来駕をお待ちしております。

私の留学生活と謡

副会長 荒川 祐吉

こんな題を出す、何か留学生活中に謡が大いに役立ったことを語るように思われるかも知れない。しかし正直いって昨年二月から十二月までアメリカ及びヨーロッパ留学に於て、その日常生活に謡が直接に効果を持ったという事はなかった。というのは私の留学目的はあくまでマーケティング理論研究の水準と体制とを明らかにし、それを支えているアメリカ大衆の日常生活を探ることにあったので特別の招待会とか、そういった公式の席に出ることもなく、また家族との交際では、独りで修行し独りで楽しむことが基本(？)となつている東洋の芸術は、そのままでは受入れられ難いものだったからである。

このように、えらそうなことをいっても、私は昭和二十九年から、藤井先生の「ひとつぐらい人間は趣味を持たなければならぬ」といっておすすめにしたがって宇治先生の門に入れていただいて、はじめて稽古を学んだような者で、年期も不十分だし、それに稽古の態度も必らずしも「この一筋につながる」打込んだものでなかった。未だに甚しい未熟の段階に低迷し、公務が多忙になるにつれ、ますます退歩の危険性を増加させているような状態なので、到底謡曲について語る資格のないものである。

けれども、私が謡曲をはじめめることによつて得た利益は、良く考えてみるとまことに測り知れないほど大きなものがある。留学中、直接役にたったことはなかったけれども、一年近い海外生活の思い出が楽しいことばかりで、帰国してから却つて日本の複雑な社会経済情勢にめまわし、ノイローゼになりかかってくるくらいであったのは、実は、僅かの年月であるが謡曲の稽古をしていたおかげであるといつても良いのではないかと思われるのである。

というのは、私は謡曲を通して、「随所随時に主となる」ということを教えられ、或程度体得しえたような気がするからである。稽古をはじめめる前の私は、ようやく一人前の研究者の仲間入りをもさせてもらったところで、自分の研究に於ても、又身辺の諸事情もまことに忙ただしく、何となくいらいらした気分の日夜追まわされていた。こんなことではいけないと思つていたときに藤井先生からのおすすめがあったのでこの道に入ったわけであるが、初めのうちは只夢中で大声を出していたにすぎなかった。それでも、稽古のあとはさすがにすがすがしく、ノイローゼ気味がやわらぐように覚えたものである。しかし昭和三十年は病気がかりとうとう一カ年稽古を休んでしまつたが、病中における体験も幸いしたのか、稽古再開後漸次謡曲による精神安定効果を自分で積極的に意識し利用することができるようになつたといつてよい。

諸君も知られるとおり、謡曲に於ては、文章も節付けも、その謡い方も、予め一定の基準と規則できめられている。しかしそれをそのまま機械的に正確にうたつたからといつてそれがホントウの謡になるとはいえないわけである。そこにシテはシテの、ワキはワキ

の、そして地は地の格と情というものが入っていないなければならない。ということは謡い手は登場人場そのものにならなければならない。謡い手の描く登場人物についてのイメージがそれぞれ、その人のシテ、その人のワキをつくっていく。こうして謡が謡になり、曲に魂がはいってくることになるのである。

謡曲に於ては設定されたシテ、ユエーションとその表現方式は厳格に固定されている。その枠の中に、しかしながら、謡い手は、彼のイメージによって無限の内容と拡がりを持った世界を創造することができるのである。しかもそれはそのシテ、ユエーションの構成要素の二員となり切り、その内部に入り込むことによつてである。(これこそ経営学に描かれている理想の経営者像と共通のものではないだろうか?……これは一種の冗談です)この態度がほんとうに体得されれば、その人の謡は格段の風格をもつにいたるであろうし、それは又同時にこの世に処する真実の智慧(単なる知識でない)を体得したことになるのではないだろうか。

私は昨年二月羽田をあとにして、途中は同行者があり、ハワイではまるで遠足気分で見光緒を満喫したが、サンフランシスコ到着と同時に全く言葉も分らぬ異国の空の下にホウリ出されたようなまことに不安なきびしい感じを味わった。しかし実のところ、どうせもうここまでできたのだし、ここで一カ年頑張りねばならぬので、ここが自分の国なんだと思ひ定めたら、すぐに周囲の風物が急に親しみをもって感じられた。またアメリカというところはそういう、何というか、すぐに「オラが国」だと思わせるような大きな包擁力を持った不思議な魅力を持つ国なのだ。シスコの対岸で、恰度

随想 —— 御節介と親切 ——

昭和三十六年卒 (B・9) 原 敏 郎

「かつて四国の松山中学の教師をしていた頃、いつも教室で片手をポケットにつつこんで授業を受けている生徒がいた。そのうちに止めるだろうと思っていたが、改まる様子がない。生意気な奴、一度注意してやろうと、君!とその手をポケットから引抜いてみると小指がなかった。彼を注意してやろうとの意気込はきえ、自分は何んと御節介なことをしたものだだろうと自責の念にかられた。これは夏目漱石の書簡集にあったものと記憶している。

御節介ということは、いうまでもなく余計な御世話ということである。御世話は親切とも云えるから、親切の度が過ぎたものが御節介であるといつてもよい。まさに御節介と親切とは紙一重であることが多い。御節介そのものは云うまでもなく決して賞められた事ではない。だから一般的には御節介をしてやろうという人はない筈である。(御節介、やきと称していいものか、御節介することを趣味としている人——中年以後の御婦人に多い様である——は別にして)然し、自分では御節介のつもりでなく親切のつもりでした事が結果的には度が過ぎた事になり御節介となる事が多々ある。右の漱石の例もそうであろう。序いでにもう一つ例をあげてみたい。

私が姫路分校時代夏休みを利用して岡山の奥地を旅行したことが

金門橋をまっ正面に望むカリフォルニア大学に到着して十日目位に、町を歩いていたら、私に道を尋ねた白人がいた。大学の構内でも建物のありかを尋ねられた。「ハハア、これでオレもこの町の住人とみられるようになったか」と思うと、トタンに心臓が強くなつて、十年位住んでいるような顔と気持で歩きまわることにした。昔から「郷に入っては郷にしたがえ」ということわきがあるが、単にしがらみだけでなく自分をその土地の一員にしてしまうことが、異った風土と社会慣習を持つ国でそこに適応する最善の方法だと思ふ。その土地の人間が自分をうけいれてくれるであろうかとか、彼等はどう思っているだろうかとか、先方さまの顔色ばかりうかがっているから外地でノイローゼになるわけである。またそんな気持でいる外国人をその土地の人が心よく受入れてくれるはずはない。

素謡の会にしろ、何にしろ、われわれは、いつたん舞台へ出たら、そこそ自分の世界と思ひ定めて、力一杯謡うほかはないということは平常から体験していることであるが、その態度が海外生活での適応のためには全くそのまま大きな有効性を発揮するのである。少なくとも私の場合はそのようであった。

はや帰国してから一年近くたった。雑用に追いまわされて落着いて本格的な稽古も出来ないまま日がたっていく。しかし今私は過去におけるホンの不十分な稽古すらが海外生活をエンジョイする大きな力となつてくれたことに感謝すると共に、また、そろそろ来年が再来年あたり、もう一度出かける手はないものかと夢想しているものである。

(一九六三・一一・三)
(神戸大学経営学部教授)

ある。山道を走るバスにゆられてみると、途中から妊婦が乗ってきた。かなりバスは混んでいたし、あの体で立っているのは大変だろうと義侠心を出して、「奥様どうぞ」と席を譲ると、「結構です」と座ろうとしない。きっと私は遠慮しているのだろうと思ひ再度すすめると今度は、「いいんです」(実際はもっと岡山の訛のある言方だったが)と怒った様な顔をした。まわりの乗客の視線が一斉に私に集中し、折角譲った席に座る訳にもいかずなんとバツのわるい思いをした。後日友人が教えてくれたところによると、そのバス道は有名な悪路で、通称「流産道路」とか。妊婦が座らなかつた筈である。この例にある私の行為については、私自身親切を尽したが、受入れられなかつたのであり決して御節介ではなかつたと確信していた。親切は快く相手に受入れられてこそ親切の価値を發揮するが、逆に受入れられなかつた時はなんとバツの悪いものだと思つた。然し人によつては、君のしたことは御節介なことだよという人もあろう。

それでは、親切と御節介とは如何にして識別するのか。ある行為を将に為さんとすとして瞬時にその行為が親切となるか御節介となるか判断できるであろうか。多分困難な事であろうと思ふ。私達が世の中を渡り歩いていく上に、親切と御節介とを識別できる絶対の標準がないのであれば、即ち親切のつもりでした事が結果的には御節介だといわれバツの悪い思いをする事がある限り、他人には素知らぬ振りをしてる事が最上の処生術なりと結論を下す人もあろうかと思ふ。極論すれば、他人に対して御節介をやかないし、又他人からも御節介してもらいたくないという一種のモンロー主義である。

サラリーマン諸氏（かく申す私もそうだが）の言動は往々にしてこの主義の信奉者の故と見受けられることがある。この主義を忠実に実行していくと例えば次の様な日常よくある一例も当然なりということになる。満員電車でもまれた為か御婦人のスーツの背中ジツパーがはずれて中の下着が或は下着の下がのぞいているのをニヤニヤ眺めているが注意はしない。（注意してやるなど御節介なことだ。彼女がわざとはずしているかもしれないのに、然しよくよく考えてみるとこのモンロー主義を押し通すのは今一つ釈然としない。それは、この主義は御節介を否定し同時に親切をも放棄しようとする危険性があるからである。社会生活に於いて御節介は追放されるのは当然だとしても親切は厳然として存在しなくてはならない。親切には始まり結果が御節介とならない親切を一つでも多く世の中に残す様、皆んが心掛けたいものである。もつとも、御節介と親切とが区別できない私如き凡人には親切をしようとして結果が御節介となつて、失敗することもあろうが、若いうちからモンロー主義に徹するよりはましだと思ふ。皆様如何なものでしょうか。

（三菱商事（株）大阪支店勤務）

能とエロチシズム

昭和三十七年卒（J・10）永田守男

まず、このような表題をつけると、神聖な古典芸術である、能楽を何と心えおるか、と云つておしかりを受けそうな気がするが、エ

ロチシズムと云うと、すぐ一般には、あの鄙猥なエロと云う言葉で思い出しがちである。しかしここで云うエロはあくまでも健康的なエロであつて、誤解なきらないよう、お願い致します。

そもそも、あの子、ちよつとエロテックだな、と云う言葉は、我々男性が女性に対して云う、かわいらしい、いかす人だ、と云う、最大の賛美であつて、世の女性諸君、夢々軽蔑して、マユをしかめるなかれ、あまりしなめつたらすると、シワが出来て、エロテックだね、と云う、あの甘美な言葉が聞かなくなりませよ、一男性の老婆心からつけくわえておこう。

さて横道にそれだが、そろそろ本題に入ることにしよう。

かつて私は学生時代、葛城の仕舞をまっただことがあつた。しかしその時にはただ内容の理解も、へつたくれもなく、ただ教えられるままに夢中で、おぼえて舞つたものである。しかも、しかめ面をしてよくぞやれたものだと思う。「高天の原の岩戸の舞」で始まり、「神の顔かたち、面なや面はゆや、はづかしや、浅ましや」と来るから、ただごとではない。こうなると尊い神様もへつたくれもなく、うるおいのある人ですな、と、いつてワッハッハッ……と来る宇治先生も、誠に人が悪いと今になって思ふのである。しかも、葛城が私の初めての仕舞であつたのであるから、皮肉なものである。

次に「三輪」に行こう、以前「三輪」の能を見た時、その謡を聞いていておやノと思つた。内容が実に、こつていたからである。

一時的ではあつたが神性を失なつて人間的な迷いに苦しむ、女神

の物語であるが、クセの文句などは情愛こまかに詠い上げ、人間社会の男女関係の複雑さを、昔も今も変らぬものと、つくづく感じさせられる所である。もともと伝説によれば、この三輪の神は男性の神であつたらしいのであるが、能では女性の神に仕上げている所などは、この作者世阿弥の苦心の作とも云えるような気がする。

このように能楽の中にも、よく見てみるとエロテックな場面が多くあり、能楽を男色の芸術だと云つて批判する人もいるらしいのであるが、決してその言葉から響いて来るような、いやらしいものではなく、あくまでも健康的なエロであることを強調したい。

ここで、もう一つ絶対に書きおとせない曲目がある。それは「松風」である。女性の人々が好んで謡う曲であるが、二人姉妹が一人の男性を想ひ慕つて昔、須磨に来ていた詩人との三年間の同棲生活の思いを、形見の狩衣を身につけて、思いをはせる。しかも、松の木をみてその男性と想ひ、とりすがろうとする。即ち、「あら嬉しや、あれに行平おたちなる……、」と云う所であるが、世の男性である以上、これぐらい想ひ慕われてみたいものだと思いませんか、実にエロテックな、すばらしい場面だとは思いませんか。

又、紅葉狩の能を御覧になったことのある人でしたら、思い出してもらえることだろうと思ひますが、鬼女が雑茂が来ることを知つて、美女に身を化えて待伏している。そして雑茂が現れると、その美女は彼を誘惑しようとして舞うのであるが、舞つて誘惑をする時、ワキの雑茂とシテの美女が一瞬すれちがう所や、地の「恥かしながら袂にすがり留むれば」でワキの袂を取つて引きとめる所などは、誠に妖艶な形を見せる所である。



「籠太鼓」などはスタンダールの「パルムの僧院」の主人公フアン・プリスが牢の中で初めて強い恋をするのとよく似ており、殺人をおかした夫が脱獄をしたため、妻が夫の身代りとして獄中につながれ、狂乱のため放免をゆるされるのであるが、牢こそわが夫の形身であると云つて、出ようとしないと云う所など何か、恋物語と云うものには国境はないように思ふし、文学的な交流がなくとも、この道ばかりは、思ふことは世界各国一様であるなど、つくづく感じているのである。

（富士銀行備後町支店勤務）

能・古典・芸能・現代

E・12 大良晃彦

はじめに

この一考察は「風韻」第二号に於ける永田守男氏の「能楽の現代に課せられた一問題——能楽と大衆との関係をめぐって——」なる論文に啓発されて草されたものである。私も日本の秀れた古典芸能「能」が現代人と分離された関係——というよりは、現代人と没交渉といった方が適切であり、能と現代人との分離・結合を論ずる以前の段階にしかないことを憂うものであります。ここに私は、永田氏とは少しく異った分野から、能が真に現代人のものとなることを願って、古典芸能「能」と現代について考察してみた。

自分が能楽に関心を持って来たせいも、近時能、謡曲、狂言等の文字を書店の店頭で、ポスターで、或いはテレビ、ラジオ等での中継や実況番組によく見るように思うし、また映画のバックに流れる音楽が小鼓の音だったり、能管の調べであったりするのに気がつくことも多くあった。殊に、今年一九六三年は能楽の大成者世阿弥(観世元清)(一三六三—一四四三或いは一四四二とも)の生誕以

来六百年ということで、能楽自体の記念催能といった企画はもちろん、新聞雑誌等のマスコミに於いても能楽を取り挙げる機会が多かった。

近年の能楽自体の動きについても、使徒パウロを主役にした新作能や新曲が生れたり、ラジオ・テレビ・映画・演劇等の他の芸術分野に於いても、能の持つ無機性、抽象性、象徴性などに注目して、能形式のものを作ったりしている。はなはだしきに至っては武智鉄二の「ヌード能」などというものの登場まであったりして、能楽の大成者世阿弥を、おそらくや仰天せしめるほどの新生面の展開が見られる。おそらく能楽の成立当時を除くなら、今程に能が一般大衆に注目され繁栄した時代はないかも知れない。そして能楽堂における観客を見ても若い勤労者や学生の姿が相当に多いようである。しかしその観能者も更に深く考えて見るならば、所謂一般大衆といえるものではなく、知識人とか知識階層に属する人々の、そのうちの一部分の人々であるのは否定出来ぬところと思われる。ここにいう知識人というのは、もちろん単に現代に生きている日本人の

全てをいうのではなく、外国文化にも相当の理解を持ち、外国芸術をも味わう程の教養の持主で、かつ日本の伝統的なものの中に育った、或いは育たなくても、日本の伝統的なものを理解している人間を意味しているかと思う。そして知識人の全てが能を理解しているかというに、そうではなく、極く一部の人のみが能の美に触れ得ているばかりで、大半の人は能に関心を抱きつかげ(動機)さえも与えられることなく置き去りにされているというのが、現代に於ける能の姿ではないだろうか。

二

能楽の発達の歴史を考えて見ると、世阿弥や音阿弥のいた室町時代初頭に於ける猿楽は今日の能の様なものではなくて、非常に大衆性を帯びた芸能であったことが知られる。(ここに猿楽というのは、現在の能と狂言を合わせ呼んだ歴史的な呼称である。南北朝時代に能や狂言が確立しはじめた頃から、江戸時代の終りに至るまでこれらの正式の呼称は猿楽であった)「そもそも、芸能とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさん(上下の人々を一樣に感動させる)こと、寿福増長の基、遐齡・延年の法なるべし」(風姿花伝第五奥儀讃歎云)といい、また「この芸とは、衆人愛敬をもて、一座建立の寿福とせり」といい、また「時に応じ、所によりて、愚かなる限にもげにもと思ふやうに能をせん事、これ、寿福なり」といっている。いずれも猿楽が上下おしなべての人々に愛玩されていたことを物語るものである。能楽に於ける演劇的・芸能的效果を世阿弥は「花」という言葉であらわし、四季折々に時を得て咲く花であり、貴賤老若男女の別を問わず全ての人が何人も面白しと感ずるも

のである。当時の能楽は、将にこういう方向に様々の工夫を為していたのである。

ところが、そうした能楽が、現代にあっては近時やや盛んになって来たとはいえ、一般大衆の間に全くといって良い程大衆性を失ってしまっている。世阿弥は「花と、面白きと、珍しきと、この三つは同じ心なり」(風姿花伝第七別紙口伝)と述べているが、現代の一般人にとって、能楽がすこぶる遠い存在でしかないという意味からは、珍しくはあろう。が、はたして面白いものとして意識されるかどうかは疑問である。しからは、能楽は新しい芸術、たとえば近世に於ける歌舞伎や浄瑠璃、或いは現代に於ける映画や演劇の誕生によって、もはや芸術としての果すべき義務を終ってしまったのであろうか。古今東西の別を問わず、時の民衆が全く興味を失い、その芸術から美を感じることがなくなつたような場合、その芸術はそこで捨てられ滅亡してしまうものである。能楽について考えてみるに、もし一般大衆が能から新しい刺激へ完全に眼を移したのであるならば、興味を失なわれた能は捨てさられる運命にあった筈である。しかし、現実には亡びないで、江戸時代を通過し、明治初期の危機をも危く通過して現代に至つてなお根強く生き抜き、近時に於ける大衆の能楽に寄せる関心は質量ともに増大しているのである。

三

能と狂言が六百年の——世阿弥以来六百年であるから、正確には観阿弥或いはもつと遡って、南北朝時代に猿楽と呼ばれて成立した時以来といふべきか——伝統を背負つて、今日なお生命を保っているということは、たとえば、法隆寺が現存するのは少しく異つた

意味を持っている。建築、彫刻、絵画などの造型芸術、或いは文芸の類であるなら、一度成立するや、それは確固たる形態を保っているから、たとえその成立当時においては世人に認められなかったとしても、後世に至つてその真価を認められるということがありうる訳である。ところが舞台芸術である能楽は違ふ。たとえ能の脚本、型付は後世に残るものではあつても、それだけでは一個の完全な芸術たることを主張し得ないのである。それは生きた人間を素材とするものであり、同時代に生きて、そして同場所に居合わせるという気まぐれな観客を相手にして演じられるものである。いくら演能者が頑張つてみても、観客にそっぽを向かれたならば、もう存続してゆくことは出来ないのである。

だから、能楽が六百年の長きにわたつて生きてきたということは、武家の時代に特殊な保護があつたことを差引いても、やはり時代を超えて人々の胸をとらえる何か、端的にいえば「美」があつたからに相違ない。こういったものが古典なのではなからうか。能楽に限らず、古典というものは、ただ単にそれが古いから、伝統が長いから尊がられたりするものではなく、長い年月反省に反省を重ねつ吟味してきた「美」の原則にのっとり、それに確信をもつて、人に媚びることなくやりとおせるような芸をいうのではなからうか。これを能について見てみれば、たとえばツレやトモの演技ひとつ、カタタリの謡い振りひとつをとつてみても、きつちりと型にはまつており、すべてが楷書風にきちんとしていて、清潔で力感があり、しかも生き生きとした感じがするのである。型がきちんとしていゝるということは、必ずしも古風なことだけを繰り返しているとい

のではない。体の機能を良く考え、「美」の原則にのつとつて、能率的にキビキビ動作しているということでもあるのだ。舞台の芸の様に体全体で表現する場合において、このことが一番はつきりするし、そういう芸であるからこそ、常に若々しく新鮮な感動を与えるのである。たしかにマンボやツイストを踊っている若者達も楽しそうに見えるが、法的に鍛錬されたリズムで、体操競技を行っている人の姿態からはもつと力強い若さを感じるのと同じである。

四

しかし、では現在演じられている能の全てが、右の意味での古典芸能「能」だと真に云えるものではないことも確かのようなだ。能はその難解さの故からか、とかく世の人達から敬遠され、正しい評価を受けにくかつた。ために、「にせもの」が横行しているようである。

本来、能とは「舞」と「音楽」という生理的な感覚を通して、人間を把握し、象徴的、あるところでは抽象的な表現をさえ持つていゝる舞台芸術である。この点で、近代以降の芸術が、ストーリーや人間の感情を通して自然主義的な手法に立っているのに比して、大きく異なる点である。また能は「あらゆる材料を煮つめて、そのエッセンスだけを抽象し、結晶化したもの。ギリギリの線だけの演劇」であるのだが、その厳しい制約の下に於いて人間が生き生きと表現出来る演者こそ、始めて能を舞う資格があり、そうした舞台だけが「能」といえるのである。もちろん、素人が能を演ずる等々をここで非難するものでは決してなく、素人の方の能も、その人が能を理解し究めてゆく道標として、十分な価値のあることはいま

もない。だが、そうした能はここで論じているような真の意味での「能」の範疇に入るものではないこともお判りになると思います。世阿弥の説く幽玄だけが能の全てであるとはいえないが、その幽玄をもつて代表される高度の象徴性の故に、自然主義的リアリズムによることは困難なことであらうし、さらに謡曲の詞章が古文によつていゝること、他の日本音楽といわれるもの同様、謡曲のメロディー、リズムに馴染みがないことなどもあつて、味読すれば、一つの色調を主張しながらも、その裏から染みだして来る別の色合の心象・形象が重層的に複雑な効果をあらわす文章の美しさも、裂帛の気合の応酬による微妙なリズム感と緊張した問合の面白さも知られることなく過ぎてゆき、ここからも能は難解だということになるのである。

かく考えて見ると能が判りにくいというのに肯けるところもあるわけですが、「能が判りにくい」からといって、能が観客に妥協して、所謂リアルにやるとか現代文でやるとかいうことになる、能楽の本来もつべき一個の完成した美を損つてしまふし、ましてや西部劇やメロドラマ調のものになつてゆくべきというような結論は何んら出て来ない。そんなことをすれば、その能は能本来の性質を失い、もはや「能」とはいえなくなるのである。

能が観客に対して要求する美への敏感さは、他の芸術に於いても同様であるが、大変厳しいものである。それは「能が判りにくい」ということは別の問題である。芸術で要求されるのは判ることではなくて感ずることではないだろうか。能が難しいという

のは、心の眼で見るといゝことが難しいのである。高度の芸術とは、人間の心と心とが高いところで触れ合うといゝことである。特に古典芸能は、西部劇やメロドラマのように向うからこれでもかこれでもかと働きかけてくるといゝ性質のものではなく、見る人の目がなければ、能の持つ美は観能者の心に通じてこないものである。

能の美を把える、心の眼で見るといゝことは、たとえば「花鏡」の批判の事に於いて、見より出でくる能、聞より出でくる能、心より出でくる能について述べ、この心より出でくる能を無心の能・無心の能といつており、そうして最後に「為平の心を知りわけて能を見る見手は能を知りたる見手なるべし」とし「出来ばを忘れて能を見よ。為手を忘れて心を見よ。心を忘れて能を知れ」と述べている。

即ち、決して技術や形式の末葉にのみ拘泥することなく、為手の心を見、更には能そのものの本質に肉薄すべきことを説いているのである。こゝにいわれると、所謂「目利き」以上の観能者になるためには「能を知ら」ねばならず、演能者に劣らぬ修行を要することになる。一方に於いて、生半かな見方をしていくものに対しては、能はその美の全容をあらわすことなく冷く拒絶するかわり、他方、一端中に入り得た人に対しては、その美の全容をあらわし、無限の奥行を見せるものだと思う。いつも週刊誌しか読んでいない人が、源氏物語を読んだとしても、十分その美に触れうる筈もない。だからといって、源氏物語が下らないとか、現代に不必要だとか、けなそうと、それは古典の罪でもなければ、古典の価値の低さを物語るものでもない。

だが古典芸術の側からは、何んらかの手引なり、理解のための動

機なりを作っていく働きかけをしなくても、大衆の側からそれらの良きを見出して溶けこんで来てくれるという考えでは少々甘すぎるようだ。今迄現代人にとって能がそんな身近な存在ではなかったことの重要な原因の一つに、能を理解しようという動機を与えられることが余りに少なかったというのが挙げられる。能を理解し、能の深奥に引きこんでくれるような方策が欲しいものだ。近時、散発的、細々としたものではあるが、能への一般的関心が惹起され、種々の場で能がとり挙げられる傾向が出て来た。しかし、もっと組織的な働き方が欲しいものである。そして我々は、能を自らに吸収し、さらに自己の内部に於いて深化し密度を高めて、能に肉薄せる秀れた見手となり、未だ能を知らぬ人をして能に接触せしめ、能の美に触れうるようにすべきであろう。

五

次いで演能者について考えてみよう。

演能者の芸位について見るならば、世阿弥はこれを三段に分つて、技術的に達者とか上手とが称されるものを下位に、観客をして面白さを感じしめ得る者を「名人」と称して中位に、次には観客をして是非善悪の批評や面白い面白くないなどという批判を加えることを全く忘れさせ、只管に深い感動にひたらせ得る者を最高位にしている。そして演能者と観客との間については、「風姿花伝第五奥儀讃歎云」において次のように述べている。能で名望を得るといふのにも種々の場合があり、「上手は、目利かず（鑑賞眼の低い人）の心に相叶ふ事難し。下手は、目利き（鑑賞眼の高い人）の心に合ふ事なし。下手にて目利きの眼に叶はぬは、不審あるべからず。上

つて、はじめて得らるる性質のものである。

こうした思考は後世にも流れて、利休の茶道における、また芭蕉の俳諧における「格に入て格に出でざる時は狭く、又格に入らざる時は邪詠にはしる。格に入り格を出でて、はじめて自在を得べし」という言にまで連なってくるのである。

とにあれ、我々が観能者として、演者に望まれることは、絶対無碍の境地に入つて、そこにおいて、偉大なる創造に生きる演者が多くあらわれることであり、良き能、真の「能」を見せるべく努力してほしいということである。そして、かくすることは、能が真に大衆の古典として生命を維持し、真に現代人のものとなる道でもあるう。

参考文献

- 風姿花伝 世阿弥 (岩波書店)
能楽研究 能勢朝次 (謡曲界発行所)
能楽全書 第一巻 野上豊一郎他 (創元社)
横道万里雄
能と狂言 増田正造 (大同書院)
能楽の現代に課せられた二問題 永田守男 (風韻第二号)

手の、目利かずには合はぬ事、これは、目利かずの眼の及ばぬ所なれども、得たる上手にて、工夫あらん為手ならば、また、目利かずの眼にも面白しと見るやうに、能をすべし」とし、これを「花を極めたる」為手というべきだといっている。

かくして演能者の方にも種々の工夫のあるべきことを述べているのであるが、ここに於いて、能楽が全く創造・進取性を失っているかという問題について若干考えて見たい。もとより、能楽の成立時代に於いては自由創造性に富んだ芸術であったことはいうまでもなく、ここに問題とするのは、現代に於ける能楽の保守成性である。現在、能楽に対する考え方として、能楽の伝統が保守成性を事として、少しも自由創造性がないという考え方があつた。しかし、これは全くの錯誤であつて、前掲の「風姿花伝」の一節にも見られる如く、自由創造の場が存するわけである。ただ、その自由は、「花を極めたる」演者に於いて始めて許されるものであつて、初心、若輩者には許されないものである。これは型の芸術に於いては共通の現象であり、先ず規格に入り、規格を完全に我がものとして後、はじめて、規格を出でて、自由に創造することを奨励しているのである。世阿弥にあつては、これを「關位」の芸境と呼んでゐる。即ち、關位とは、幽玄（幽玄について詳説すればきりがないので、ここに於いては、「何ん」と見るも、花やかなる為手、これ幽玄なり）（風姿花伝）とあるのをもつて説明に代えておく。の境地に達したものが、幽玄の芸位をつき破つて、心のままに創造しようとする芸位をさすものであるが、そこに表われてくるものは、幽玄の根底にしっかりとつながつたものであり、幽玄風で修練しぬいた芸位の力によ

能とオペラ

今秋の音楽界には同時に大きな二つの花が開いた。一つはイタリア・オペラであり他はドイツ・オペラである。ここではこの二つのオペラに焦点をあわせて少し考えて見ようと思ふ。

二つのオペラを特徴づける時、クンストのドイツ・ゲニーセンのイタリアという様に言われる。その通り、イタリア・オペラの方は舞台装置、照明、衣裳等華やかなものが多く、メロデーも美麗である。そして歌手中心的に観衆に楽しんでもらうオペラである。一方これと違ってドイツ・オペラは「楽しむ」よりは「考える」「舞台と対決する」、という要素が強い。イタリア・オペラの様にはリアアが殆ど遊離している様な状態はないし、音楽以前に演劇であるという考えが判然と前面に出ている様に思われる、即ちオペラを音楽による演劇と考える訳である。ここで興味を引く事は、このドイツ・オペラに於る演出が前記の考えの下に視覚による抽象化・象徴化の方向にあるという事である。この点に日本の伝統的な音楽劇と言える能に於る演出と非常な親近性を感じ取る事が出来る。然しドイツ・オペラの場合に於る抽象性・象徴性は具象性から出発し、種々の暗中模索の中に到達したものであろうという点を日本の場合に照射して考えると少し様子が違う様である。日本の場合、抽象性に

出発して抽象性に終つてゐる感がする。(黒田)

プロフィール「風韻会」

昨年三十周年を迎えた神戸大学風韻会は、何かにつけて新しい段階に歩を進めた。時期將に学舎統合、県立農大・神戸医大の吸収等による神戸大学の総合化にあり、風韻会もそれに適合した組織を要求されており、希望と悩みに激動しています。かかる状況のもとにある風韻会の姿にスポット・ライトを当てて、現役会員の考えている事ややっている事の一端を特集し、紹介してみました。

本来の会活動や合宿、模擬店経営などかなり広範囲にわたっておりますが、学生時代を思い出し、共に考えまた楽しんで頂けたらと思います。

A 共同研究

―サークル論を中心として―

はじめに

この共同研究は、「風韻」創刊号所載の松岡誠夫氏のサークル活動についての考察に呼応したものである。

我々は、今夏の摩耶山天上寺に於る合宿においてミーティングをもった。ここに、そのミーティングの意見をもとに、現状分析を行い、問題点を指摘した。もとより不十分なものはあるが、ここより新しい論争が起り、今後の風韻会を築く起点となれば幸いである。

昭和三十七年に神戸大学風韻会は創立三十周年のステップ・ストーンを踏み締めた。

ここで我々サークル員が考えなくてはならないことは、歴史・伝統をもつサークルではあるが、風韻会が大学のサークルとしてどうあるべきかという問題に立ち返り、もう一度根本的に検討すべき段にきていること、これである。

まず、風韻会の現状の分析からこの問題に論及する。

1. 現状分析

我々の風韻会は、筒井台時代はさておき、発足して以来、六甲台を主要なる活動の場とし六甲三学部を中心にしてその活動が行われてきた。そしてその支部という形で姫路分校風韻会が設置され、こ

こに後統部隊たる1・2年生が六甲とは別個にサークル活動を行い、ジュニア課程終了と同時に自動的に本部のサークル員として活動を行うのである。これが従来の風韻会の活動軌道であった。

併し、今や我々が注目しなければならない事象、問題点がある。

第一には、たこ足大学の異名をとる神戸大学に、学舎統合の現実化がせまっている。つまり、御影学舎が鶴甲山に移転され、来年には姫路学舎を鶴甲に統合されて教養学部として発足し、文理学部は六甲ハイツに、また兵庫県立医科大学が本学医学部として編入され六甲ハイツに学舎を持つことになる。かくの如くして、三学部の六甲台から全学部（但し教育学部は除く）の六甲台となり、神戸大学自体が総合大学としての姿をとり始めたのである。

第二には、風韻会のサークル活動のマンネリ化である。又これと関連してのサークル員のサークル意識の欠如である。これは非常に大きな意味をもつ現象であると思われる。しかし、この点に關しては、今年の夏季合宿のミーティング等により解決の方向へと進んでいる。

第三には、第二と関連することであるが、風韻会の活動目的及びその方向性の欠如である。これは大学のサークル活動の目的に通じる大問題であるが、我々は風韻会独自の目的を持ち、それにそつた活動方針をたてるべきである。

このような事象は、今までに無かったのではなく、このような意識をもつて進めてゆく方向が、明確には示されなかったのではないかと思われるのである。

以上三点を指摘したが、これらは相互に関連し合つて、将来の風

韻会の活動の障害となろう。

すなわち、第一の問題点、学舎統合にともなう、三学部中心のサークルから全学部の学生を対象とする全学部中心のサークルへの質的变化が、風韻会に起ってくるだろう。これは従来3・4年生により構成された風韻会が、1年生から4年生での、そして三学部は勿論、文・理・教育学部、教養学部をも含めた質的にも量的にも名実ともなった神戸大学の文化サークルとして発足せねばならないことを意味する。ここに従来の活動方針ではやってゆけない問題点が出てくることは明白である。我々現サークル員は、一年後に控えたこのような事態への準備として、第二・第三の問題点を克服すべきである。

新設

風韻会々誌「風韻」も、創刊以来今年で早くも4号を数え、現役会員一同は、当該内容の充実而努力しております。

次号に於ては、創刊号巻頭言「……現役会員、卒業生会員の連絡を一段と密にし、以て風韻会今一層の発展を期そう」という初志貫徹するため、新しく「先輩消息欄」を設けることになりました。後日、先輩各位の内より無作為抽出のうえ数名の方に寄稿を御願ひ致したく存じます。その節は何とぞよろしく御協力を御願ひ致します。

第二の問題点、すなわち活動のマンネリ化とサークル意識の欠如は、第三の問題点、すなわち活動方針の明確化、実行化の中で解消されてしまうものであると思う。

風韻会としては、この第三の問題、すなわち大学サークルとしての風韻会はどうあるべきかという問題を解決しなければならぬであらう。

2. 風韻会の目的・意義

この問題に関して、我々現サークル員は、夏季合宿のミーティングに於て討論した。この時に得た結論を中心とし、その後のミーティングにより、この問題をより現実的なものにして風韻会の将来の礎にしたいと思う。

この問題を論求してゆく際、風韻会が神戸大学の一文化サークルである点を忘れてはならない。つまり、風韻会のサークル活動に於て、文化活動を行う大学サークルであるという事が大前提となるのである。

では、文化活動を行う大学のサークルは何を目指しているのだろうか？

この問題は二点に分けて論述されるであらう。第一の問題は、文化活動とは何かであり、第二には、大学のサークルとは、社会人のサークルと性質を異にし、おのずから、これと違った活動があるのか否かである。これは、我々が風韻会の問題として考慮する時、非常に重大な意味をもつ問題である。

○ 文化活動

現代社会に於ては、個人は社会のメカニズムの中に没し、一つの

のずから、ここに見いだされるのである。即ち、風韻会というサークルの中で、我々は謡曲を研究し、謡曲・能楽をより深く理解することを目的としているのである。

この点より風韻会活動は始まるべきなのである。次の三点がこの追求への附随的現象として現われてくるのである。

(1) 謡曲の探求に際し、人間関係が問題とされる。それぞれ個性ある個人が集まって、一つの曲を演ずる際に要求される「チーム・ワーク」を作り出すためには、サークル員間の心的結束が不可欠なのである。勿論、謡曲や仕舞における上達は個人の努力にまつところが大きいのだが、又結束することによって、各人のそしてサークル全体の謡曲に於ける上達もみられることになる。

(2) 一方大学のサークルとしての性格よりすれば、現在の大学制度下に於ける学生間の内面的な交渉並びに思考習慣の不十分さを補い、大学生活を潤いあるものとするために、サークルがその機会を提供する役割の一部を果している。とすれば、ミーティングに於て謡曲に関する事のみならず、広く政治経済問題をも話し合うことは無意味ではない。このようにして各サークル員が人間的に成長することは謡曲への接近をも容易にするであらう。

(3) 更に集団としてのサークルという観点よりすれば、団体生活を送ることによって社会的協調性を養うことも、サークル自体のもつ本来の効用といえよう。

あとがき

以上の考察では、議論の重点は文化サークル一般の観点にあったが、完全に「風韻会」を論ずるにあたっては、さらに技術的および

歯車として活動するに過ぎない。すなわち、個人は己れに対する自己疎外を程度の差こそあれ、もっている。

ここに文化活動は、自己の回復を目指した自己確立を示す一手段である。換言すれば、人間は常に何らかの価値の追求を目指しているものであるが、しかし、人間が真の人間としての確立を示すのは、文化活動を通じての文化価値への追求である。ここに文化活動の本質があり、現代の文化活動の意義が存在しているのである。

では、この文化価値の追求としての文化活動の、サークル活動としての意義はどこにあるのか。それは、個人の能力の限界と人間の集団化という事に集約されるであらう。我々はここに於て、サークル活動を認識するために、この集団化という点に力点を置く。特に大学生のサークルとしては、集団の背景となる、個々のサークル員の資格、能力等における平等性に注目しなければならぬ。

○ 社会人サークルとの関係

ここに社会のサークルとは違った面が前に押し出され、この面を生かした文化活動、文化的価値の追求が重要なものではなからうか。すなわち、大学生として追求出来る方向を見いだしてゆかねばならないのである。その活動が、この過程を経た後において、社会のサークルのそれと同じものとなったとしても、それは許容されるであらう。蓋し、この過程こそ意味をもつからである。

集団化にともなう人間関係の問題もあげられると思う。

では、風韻会としては、どうあるべきであらうか。風韻会は、他の文化サークルと同様に、文化価値の追求を目指す、その手段を「謡曲」に求めて活動しているのである。風韻会の目的・意義はお

芸術的側面にも論及しなければならないのである。この点に関しては、さらに討論を重ね、次号誌上にも発表したいと思えます。現役諸君がこの点について各自考えておくのはもとより、先輩各位の忌憚らない御意見をお寄せ下さい。

B 風韻会合宿考

E・13 黒田昌吾

一、現在、合宿は風韻会の年中行事の中でも重要なものの一つとなっている。合宿の目的には色々あるが、先ず第一にその集中的な練習によって個々人の技術を磨く事であらう、第二に集団生活を通過しての人間関係の醸成がある。この点に関しては殊に未だタコ足大学の悩みをもつ本学の中にあつて、それを分担する本会に於て重要な意味をもつものであるし、又先輩との緊密なるきずなを存在を願う本会に於ては、合宿は先輩と現役との交流の場である点に於ても然りである。第三に可能な限りに於て近畿近辺の各所に於て実施し、見聞をひろめ、旅情を味わう事等々が挙げられる、毎年春夏二回に行われる合宿も次第にこれらの目的を遂げ、風韻会に定着しつつあることは後述の現役にとって喜ばしい事である。

風韻会は現在、サークルとしての転換期にあり会の在り方、態度の決定がせまられているといえる。この様な雰囲気の中で最近の短期間の内に合宿も唯強化練習の為のものから脱却して更に積極的に

本会の進むべき方向を見極めようとする傾向が判然と出て来た様に思われる。その一例として、本年夏の合宿の際に討論の機会が与えられ、先輩を混えて文化サークルとしての風韻会の目的と意義及びその上に立っての現状打開策の究明に關し種々論ぜられた事が挙げられる。これは構成員に問題意識を植え付ける点で大きな役割を果したものである。

然し、これらの議論は直接ここで取扱おうとしている問題ではなく、他稿に於て詳しく論ぜられている筈である。ここでは合宿の概要を見る事になっている。

二、前置が長くなつたが、本年の合宿の模様を夏季合宿日誌を中心に拾つてみる事にしよう。今夏は八月二十六日(月)から九月一日(日)の一週間にわたつて摩耶山天上寺にて実施された。

費用は一日五百円也、最近行われた夏季合宿地は淡路島や高野山や吉野山という様に多少とも旅情を味わい得たのに対し、今回はその感は実に全くなし、近すぎたところばす者多く、この点で評判が悪かつたのみならず、更に切実な問題として、食事が精進料理と来たものだからたまつたものではない、日誌も「昼食により精進料理である事を確認、前途多難」と溜息をつく次第である。合宿中の土曜日に行われる恒例のコンパには流石に肉料理が出た——「今日は土曜日であるので四名の先輩が来られた先輩諸氏を聞んでのコンパ。連日の精進料理に参つていた我々の目に久々にトンカツとビールが映り、ホットした」このホットした気持は正に知る人ぞ知るである。この翌日が最終日である。この日には先輩を混えて、合宿の成果を發揮すべく発表会が行われる。声というには少し気の置ける音

の人間關係の醸成と、他方に於いてこれらの合宿の思い出がそれに参加した者の共通の思い出となつて風韻会の大きなきずなとなつて行く事を願つて止まない。最後ながら、出来るだけ多数の先輩が合宿に参加されることを期待しております。

C 狸々開店の記

J. 12 山本正人

一九六三年五月十二日曜日。天候はすぐれず、ぐずつていた。あわただしく連絡に走る者、或いは金づちを振つて屋台を作る者、最後の飾りつけを行う者等々が学園をうずめていた。開学記念祭に際して模擬店を経営して、がめつく金もうけをしようとする者達の群である。周りを見回して見る。似通つた屋台が講堂の前に列を成している。その周囲にたむろする学生達の中に、風韻会の会員の姿が見える。彼らもまた模擬店経営を行おうとする者達である。「狸々」これが彼等の店の名である。これら模擬店が活動を始める前に、「狸々」の誕生の契機について少々述べてみようと思ふ。

「狸々」なる模擬店が生れたのは、昭和三十七年五月のことであるから、十一回生の人達が最高学年として在学されている時の事であった。当時風韻会は、機関誌「風韻」三号発行等々で赤字財政を続けていた。いくらかでも、その足しにするべくアルバイトをする必要があつた。その手段として登場したのが「狸々」なる串カツ屋

声をひき絞つての熱演である。先輩は我々の声がワンポイント低いと評されたが、それも無理のない所なのである。連日の練習に喉が言う事をきかぬのである。この練習一日六時間のハード・トレーニングである。午前、午後各二時間半の練習に加えて朝飯前、夕食後の各三十分の個人練習がある。日一日と皆の声は奇妙になつて行く、喉に手拭を巻いて寝る者が次第に増えて行く、殊に朝飯前の練習は空き腹を抱えて皆の顔と声といひ悲愴である——風韻会残酷物語——。

最近は一、二年生の中で、練習に關しても又雑務に關しても所謂要領の非常に宜しい人が多くなつて来たのは少し合宿に生気を欠く一因となつている様だ、この練習の間に楽しいというよりもホットする休憩時間がある。マーシャンでボンボンチーカンカンと頭に来ている者、女性を混えてのトランプに享じてキャーキャーと嬉しがっている者、ウクレレを脇に抱えてジャンジャンと雑音をたてる者、練習に力尽きてか睡眠不足がたたつてかゴロゴロ寝転がっている者、かと思えばショートパンツに運動靴もりりしく体がなまらぬ様にとトレーニングに出かける者、練習の組分けと曲の割り振りにウンウン言っている幹事連等々、一寸した社会の縮図たる一大絵巻が展開されるのである。又合宿での就寝前の雑談は中々印象に残るものである。殊に先輩諸兄の特殊講義とやらは我々を圧倒するに充分である。今夏は又近藤君(B13)の怪談が異彩を放つていた。彼の声はその特得の音色を以て怪奇ムードを作り上げるのである。一寸した怪談ブームが起つた感があつた。

以上思いつく尽に合宿の事を述べて来たが一方に於いて合宿中で

である。唯残念な事は当初の目的が管理面に欠陥があり、ロスが生じた結果、果されなかつた事である。純収益が千円に満たない結果に終り、一同残念がりはしたものの、最優秀店として表彰されたり、会員相互の協調精神の高揚に役立ったりした事に大いに慰められたものである。純益こそは少なかったが、第一回「狸々」経営は管理方法を確実にし運営を能率よくしさえすれば、相当の収益を得ることが可能であることを教えてくれた。

十一回生を送り出した年の春、即ち今年の春の合宿に於て、第二回「狸々」経営を確認した。そしてその場で、その責任が小生の身にかかつてきた。我々は利益を上げることに第一目標を置いた。風韻会の会員がその串カツを食い酒を飲んで騒ぐことは法度である。第二に、部員相互の協調精神の高揚を目的とした。しかし考えてみるに第一目標といい、第二目標といい、両者は別個に考えられてしるべきでない。利益を得るためには、必然的に協調精神といふものが必要となり、利益を得ようと努力すれば、おのずから協調精神といふものは生れてくるものである。従つて、我々は錢もうけに一路邁進すれば良い訳である。以上の如く資金難の風韻会財政を健全なものにする使命を荷なつて、この「狸々」が登場したのである。

我々は、最低二万円の純益を上げなければならぬと考へた。それは、雑誌発行に伴う赤字の一万六千円と部費の補助としての二万五千円、更に当日の会員の労働奉仕をねぎらう意味の慰労会補助としての二万五千円がその内訳である。売上の二割を利益と見込んで、十万円の売上が必要になる。串カツ一皿が五十円であるから、二千皿売れなければならない。ただ、扱ひ品が串カツだけでなく酒、ジュ

ス、刺身などもある訳だから、客一人が使う金額は五十円きりであるというにはまずない。大半が酒と串カツ、酒と刺身という様にペアで飲み食いする筈である。従って平均百円、ないし二百円の消費を行うと考えられるから、二千の串カツを二千人にさばかなければならない訳でもない。ざつと七百人の人にさばけば良い。神戸大学の学生総数が概算四十名強、職員、一般の人等々をも考慮に入れるなら、その動員数が総数の三分の一であっても、千二百から千三百人の人が大学祭に出席するものと考えられる。そのうちの七百人を、「狸々」のお客さんとして考えることは、それ程無暴であると思えない。

目標額の決定を見たものの、前年度の資料が何も残っていないため少々準備に手間取った。前年度もお世話願った本職の串カツ屋さんの所へ出かけた。国鉄六甲道駅前の「入船」という串カツ屋である。

この店は先輩の行きつけの店であったそうであるが仲々感じが良く、五十才前後のおじさんとおばさんが二人で経営しておられる。串の方も非常に美味であるし、なんともいいことは淡白な雰囲気がある。そこに存することである。更につけ加えて置くべきことは、「安い」ということである。我々が串カツ屋「狸々」を運営するにあたって、当店へ赴くことは五指にあまる回数であった。出かけたからには生来好きなるアルコールを前にして飲まずにいられないからつい手が出る結果となる。従ってその費用もかさみかなりの額になるから、いかに安いといっても学生である身に金のある筈がなく、ついつい交渉費と称して「狸々」準備金に手をつけることが一、二度あつ

ている。こうしてサークル員に多大の負担をかけながらも、ようやくにして三百三十四枚を売りさばくことが出来たことは幸いであつた。何しろ前年の記録が全然残っていなかったから、前売券の発行枚数もい加減のものであり、従って前売券の売却数が、その半分に満たなかったことは、全サークル員の努力不足を物語るものでは決してないものである。これは学生総数に比して模擬店数の多いさを考えてみれば明らかであろう。

とにかく前売券売上げ代金の一万余七千七百円が、運転資金として確保された訳である。この金でまず購入しなければならなかったのは鍋、コップ、バケツ等々の什器類であつた。主婦の店ダイエーなどであれこれと捜し回し、安い買物をしたといつて喜んで、荒物間屋で不良品を捜し出さなければならなかったが、串カツの材料などは後払いで良かったからさういふ分と楽であつた。楽であるといえれば材料の

御寄附の御願い

ここに「風韻」第四号を御送り致します。
さて、現在の風韻会の財政状態は非常に窮乏しており、正常な活動の持続が手一杯という有様です。つきましては、誠に僥越とは存じますが、雑誌代・諸連絡費および風韻会活動補助として、一口七百円の御寄附を御願ひいたく存じます。
同封の振替用紙を御利用の上、出来るだけ多数口御送附下さるよう御願ひ致します。

先輩各位

神戸大学風韻会

た。ここで思うことは、当初より若干の交渉費は計上しておく必要があるのではないかということである。これは自分の行動を妥当化しようとするのではなく、準備・交渉にあたっては、好むと好まざるにかかわらずこうした出費がかさむものであるからである。少し話が横にそれたようであるが、ここで元に戻して「入船」へ五、六度足をこぶことによつて「狸々」経営の目算は一応立ったのである。油、肉、パン粉、キャベツ等々すべてを見積つて四万八千円、什器を加えると五万余円という予算が見積られた。従つて我々が当初に考えていた、売上十万は必要でなく、七万円前後で良いことになった。自分で作つて売るのは成品を買入れて売るに比較して、かなりの収益があるものだと思つたものである。計算の上では五万の予算で七万の売上げがあれば、二万の収益という訳であるが実際にはそう簡単に行く筈もない。そこで或る程度の売上げ確保を狙つて前売券を売つたのである。串カツ、酒、ジュース、刺身の申一品五十円也の前売券を七百枚調達した。四月二十七日（土曜日）が発売日であつたが、幸先よく一時間程で三十枚余りを売ることが出来た。翌々日の月曜日には部員に二十枚前後を分擔させ、責任額の売却を計るよう要請した。園遊会が五月の十二日（日曜日）であつたから、前売券売却には充分の余裕があつた。しかし、園遊会に出店するサークルが多く、三十近い模擬店が競つて前売券を売ろうとした為思う程売上げは伸びず、又売れたと思つても交換条件に、他サークルの前売券を買わねばならぬはめになることが多く、それが全部各サークル員の個人負担とならざるを得なかつたことは全くの遺憾であるし、我々運営担当者としても済まなく思つて

購入等はすべて、「入船」のおばさんが行つて下さつたのだから当然のことといえる。こうして準備万端整つたのであるが、園遊会の前日はもう一つはつきりしない天候であつたから、肉に串を刺しておいたり、ジャガイモを煮て置いたりすることが出来なかつた。雨であれば園遊会は延期になるからである。やむをえずその準備を断念したものである。

五月十二日（日曜日）は前記の通り、良い日和りではなかつた。

園遊会を管理していた応援団の連絡では、天候が良くないから延期するとのことであつた。そのため朝早くから出かけていたサークルではその言を聞いて、準備を取り止めにし帰宅したとか。お蔭で彼らは後に決行する旨を聞いてから、てんでこ舞の目にあつたそうである。我々の「狸々」についても、その事は順調に進みはしなかつた。取り消した注文を改めて申し込んだり、又未完成のままの我々の「狸々」の屋台を完成させ、飾りつけをしなければならなかつた。

ようやく屋台の方は何とか出来上つたが、串カツの方は準備が全く遅れて、一時間店の筈が一時間程遅れてしまつた。その間にも前売券をもつて沢山の学生がおしよけて来た。ようやくにして串も揚がり始めたが、客足には仲々追いつけず、串カツを求めの人々が常に「狸々」の前に三十名前後がたむろしてゐたものである。とにかく揚げても揚げても串が足りない。いそいで揚げるものだから、ころも満足にくつていないものもぎらに出来た。それでもどんどん売れるのである。それが前売券と引換えの人より現金で買ってくる人の方が多かつたのだから、まんざら悪い出来ではなかつたようである。常に串の揚るのを待っている人がたむろしているのだから我々がつまみ食いをする串は残らない。揚るはたから奪い合う

ようにして持つて行ってしまうからである。こうした状態がざつと四時間は続いたと思う。手伝いに来てもらっている「入船」のおじさん達は勿論、我々も息つく暇もない程であった。かのおじさんの言がふるっていた。

「今日はタバコ代が安くつく、とにかく一服する暇もないからな。」

とにかく我々が息をつけたのは七時半を過ぎていた。その時に初めて気がついたのだが、我々は昼食も夕食もとっていないかった。やけに腹が減っていたから一寸失敬とばかりに、串カツをつまみ食いしたのであるが、非常に美味であると思つたものである。

猛烈に忙しい目に合つたが、それだけ利益が上がることを思えば何んでもなかつた。しかも最優秀店として表彰されたのであるから、少々疲れも吹き飛んでしまふというものである。

尚、当日の収支決算は下表の通りで、総売上は六万二千二百円で純益は一万九千四百円であつた。

この「狸々」経営を無事終えるに當つて胸に湧いてくるのは最初の申し合わせの通りサークル員の只食いは殆んど皆無といつて良い位であり、全員が協力一致の精神を発揮し初期の目的を達成することが出来たという一つの安堵感である。又、全員の協力一致がサークル員意識を向上させたことは、副次的なものであるとはいへ、非常に有益であつた。更にはこうした模擬店を出すことによつて大宇祭を自分の物と感ずることが出来ることも素晴らしい事であると言へるのである。

蛇足であるかもしれないが、毎年こうした模擬店を出す計画だけ

能楽における叙述成分

B・13 戸次威左武

すべての舞台芸術がそうでありますように、能楽も常に見物人に見せるために作られた提示芸術です。ところが能楽には、この提示成分に叙述成分が混入されているところにその特殊性があります。しかもこの叙述成分を主体とする組織の上に提示成分が付け加えられ、それでいて一見いかにも提示表現としまつたものを受け取れるように工作が施されています。

例えば、脇能物の「高砂」についてみますと、初めにワキが次第の囃子で登場し、次第の謡をうたい、名宣を言い、道行を謡つて高砂の浦に着くと、次に、シテとツレが真一声の囃子で登場し、真一声の謡をうたい、サン・下歌・上歌を謡つてワキの前に出る。次にワキから話しかけて、シテ・ツレ・ワキの問答がある。此ところまでは提示意向が現れていて、いかにも劇的進行を続けそうに見えます。しかも問答の内容は、相生の意義であり、夫婦和合の説明であり、「万葉」「古今」並立の暗示であり、延いてはそれが天下泰平、国土安全の基礎ともなるべきことに言及します。但し、此の最後の部分は合唱部（地謡）によつて代弁されます。合唱部は多くの場合シテの代弁者の役を勤めます。殊にそれから先の最も主要な部分の詞章即ちウクリ・サン・クセは殆んど全部合唱部の吟唱であります。そのウクリ・サン・クセで最も重大な主題的説明——松の常緑によつ

ら、先輩諸氏も一度はこの串カツの味を確かめられんことをお願いして置きます。

最後に品質、経営方針、衛生管理等の優秀さを認められ最優秀店として二度目の表彰を受け、その賞品としてトイスターを一台受け取つた。このトイスターの処分には色々方法が考えられたけれども結局、孤児院に寄附することに落ち着いた。そこで何処かの孤児院に寄附する事という条件付きで、神戸新聞社に預けて来たことを報告して置きます。

昭和三十八年十一月六日記

「狸々」収支決算表

収 入		支 出	
前 売 券 上	16,700	備 品(コ ロ・	3,280
(334枚)		バケッ等) 費	
現 金 売 上	45,500	材 料 他	15,100
		酒・ジュース	7,945
		刺 肉	3,800
		そ 肉	5,525
		燃 (ガ ス・木	2,410
		謝 の	2,000
		純 の	2,790
			19,400
	62,200		62,200

但し 純益 19,400 円 は下記の通り配分された。
 前年度部會計赤字補填 16,000
 部員慰勞会費 3,000
 今年度部會計に繰入れ 400
 計 19,400

て象徴される繁栄と強固の意義——が叙述されます。その部分では提示さるべき殆んど何物もなく、シテは舞台中央に座つたきりで、ただ合唱部が囃子方に助けられながら吟唱を続けるのみで、吟唱の詞章は徹頭徹尾叙述意向に裏づけられたものであります。次にロングギとなつてシテとツレは退場します。ロングギはシテと合唱部の掛合の吟唱で、合唱部の吟唱の初めの部分はワキの代弁であります。最後には作者の側からの叙述となります。以上が第一場であり、その部分の主として見物人の耳に訴えて聞かせるように工作されてあるのが特徴です。前述の如く、初めにワキが登場し、次にシテ・ツレが登場し、問答に入る所までは、提示的演技の形式を備えていますけれども、結局は、そこまで見物人の興味を惹きつけて置いて、それから後でシテに主題を説明させるのが目的であり、その説明は実はシテの代りに合唱部に叙述させるという形式を取っています。内容からいえば、シテ一人の演技であり、形式からいえば、合唱部が叙述者であります。

次に第二場は第一場と趣を異にし、場面は住吉の浦で、初めにワキの待謡があり、出端の囃子で後ジテが住吉の明神に扮装して現われるのだから、これは提示的表現と見ることが出来ます。明神出現の理由はワキの来訪をねぎらうためであり、その意味で颯爽たる舞踊（神舞）を見せ、最後のロングギで聖代を祝福します。しかし此の場面は「高砂」全体の均整から見れば、一種の結末的タブロオの如きもので、主題的叙述はすでに前場で終つていてありますから、舞踊そのものはもちろん重大な価値を要求されるものではありませんけれども、舞踊がクセ以上に重大なものと速断することはでき

ません。公平にいきますと、世阿弥が開眼、開眼という言葉で説明したように、すべての能楽の作品には耳に訴える要点と目に訴える要点があり、クセは前者で、舞踊は後者でありますから、前者の叙述表現と後者の提示表現は、単独に見れば、同等価値のものと考えてもよいですが、作品を一つの全体として評価するならば、その二つの要点の配置によって重みに多少のかたよがりがあるものと見ることが出来ます。というのは、能楽構想の原理として序破急の法則が採用され、それをば世阿弥も強調していますが、その理論によりまずと、序一段、破三段、急一段、合せて五段の構成が妥当な標準であり、その中でも破の後段が最も重要な部分であります。「高砂」についていえば、初めのワキの登場は序の段、次のシテ・ツレの登場は破の前段、問答から合唱歌に移る所は破の中段、クリ・サシ・クセが破の後段、最後の後ジテの舞踊は急の段になります。ですから、舞踊も重大なものではありませんけれども、クセは全体的に見てそれ以上に重大なものであるということが出来ます。このように考えてまいりますと、能楽においては、叙述成分が提示成分よりも重要であることがわかります。

次に能楽表現の最大特長の一つであります幽玄について考えてみましょう。幽玄は本来は歌道に於ける最高の表現段階を標示する術語でありまして、その根本概念は、一種の隠微な美の高次表現であります。隠微はあらわでないことを意味しますから、あらわでない薄明の美しさには何物かが隠されていなければなりません。能楽においては、その隠されているものが美その物でありまして、美の隠微ということが幽玄の本質であると考えます。例えば花の美しさ

にしても、それがあらわにむきだしになっているよりは、霞の底に隠されてあるとか、陽炎に遮られてあるとかしますと、美しさに深みが出てきて、華やかさは一層品位を増し、きらびやかさは漂渺として引き立って来るのだと思います。したがって、幽玄を強調する能においては、機構をできるだけ単純にし、シテを中心として、他は省かれるだけ省き、省かれない者は皆シテの演技を助けるだけの役目にします。そして提示成分である対話はなるべく簡単にし、クライマックスのクリ・サシ・クセでは、シテはあらわに演技を行わず、合唱部の叙述によってまるで絵面を見ているように、その奥にひそむ美しさを連想させます。そして今度は優麗典雅な舞踊を提示して、その美しさを強めようとするのであります。幽玄の表現においても叙述成分は重要な役割を演じているのではないかと思えます。

謡曲史跡めぐり (二)

大和路―「井筒」跡を訪れて―

E・13 段 野 治 雄

大和の朝はもやにつつまれていた。どんよりした空模様、青空ともみじに象徴されるような秋の日和でないけれど、やはり秋の気配が深く漂っている。車中からは、収穫まぢかい頭を垂れた稲穂の黄

色い広がりが見られる。そしてそのところどころに村があつて、ただ民家の白壁だけが朝もやをついてくつきり浮びあがっている。白壁と黒い瓦屋根との見事なコントラストは、大和に今なお一種のみやびさかもし出しているが、それは歴史と富の象徴でもある。大和はいつまでも古い形態のままに留まっていけない。一方に於いて阪神の発展に押されてベッドタウン化する。それはあの経済的でない「白壁」の建築物を覆い隠さん勢いである。他方に於いて、自力で立ち上らんとする。農村に於ける初期のその一例を、水田の中に点在する養魚場に見た。大和郡山は金魚の町である。

近鉄天理駅に着いた。それまでの思考はどきもぬかれて引込んだ。突然の賑わい。前日天理教の大祭だったとかで全国から人が集まっている。ここでは、黒地に背中に白文字のはいった、はっぴが幅をきかす。女学生も若者も誰でもすなおに着こなしている。天理教は、道路をはじめ町づくりにもりだしている。これも大和のひとつの潮流である。

駅前からバスに乗り北へ向う。襟本で降りた。すぐ前に鳥居があつて東の丘陵に向つて並木道がのびている。小高い所に、ひよろひよるの杉や松に覆われた少々すさんだ神社がある。日曜のこととて小学生がどんぐりを採ってしつとりと濡れた草むらをかきわけている。今日は「井筒」の在原寺跡をたずねてきたのだがそれらしいものは見あたらない。男の子に聞いてそれが和爾下神社であると知った。二万五千分の一の地図では在原神社になっているのに。

彼らに教えられて目的地在原神社に着いた。それはかの神社とは道路を隔てて西側の少し南よりどころにあつた。遠くからまず目

にはいったものは、丁度相撲の野外土俵の上に四本柱で立っているような屋根と、その下の板囲いだった。筒井筒だった。遊戯用具こそないが村はずれの貧弱な児童公園といった感じの狭いところに、そしてその中をすじかに道路が通っているのだが、そこに古えの在原寺があつたのだ。

在原寺跡

平安朝のはじめ平城天皇の御子阿保親皇承和二年創建説と、元慶四年親皇の子在原業平が亡くなった後、その子の棟梁が創建したという説があるが、とにかく平安時代のはじめ(九世紀)からここに在原寺があつた。明治初年までは本堂・庫裡・楼門などを存したが、今は廃寺となり、阿保親皇と在原業平を祀る在原神社が残っている。

在五中将在原業平は我国随一の歌人であり、また絶世の美男子であつたといわれる。業平の作という伊勢物語にのせられた歌物語の、

筒井筒井筒にかけし磨が文

生ひにけらしな相見ざる間に

の歌や、謡曲の井筒にちなんだ筒井筒のほか、めおと竹・一むら薄なども今日はその石標などの名残を留めている。

天理市

なにしろごたごたと多くのものがある。筒井筒・夫婦竹・句碑・一むら薄・社・小さな墳墓趾・石碑など。……近くの中年の男の人がいろいろと話をしてくれた。その人の子供の頃にはまだ荒れていたとはいへ、築地塀が残っており木が繁つてまた風格があつたとい

う。今はブロック塀にかわり、身のたけほどの桜の苗木が所々に植わっている。真新しい姿の筒井筒。大きなふたを取ってのぞき込んだら水面はひどく高かった。業平の直衣を着たシテの有常の女が筒井筒のそばでもしたすあの情趣はここでは殆んど味わえぬ。せいぜいのところ、河内の国高安の女に追っかけられた業平が井筒のそばの椿の木にのぼってかくれたのを、かの女井筒の中をふとのぞきみてその中に業平の姿をみとめ、身を投げて亡くなってしまった、という伝説を思い浮べるくらいなものである。ここを訪れる人のう

第八回三大学交歓話会のお知らせ

恒例の本交歓会も第八回を迎えて、一橋大学の主催の下に東京で行なわれることになりました。先輩の連吟は「草子洗小町」となっておりますので、先輩の皆様方、特に東京近辺に御在任の方は、是非とも御参会下さいまして、舞台に、またコンパに興じて頂き、現役の活躍振りを御覧頂きたいと存じます。

尚、日時および場所は未定ですので、後日改めてお知らせ致します。

先輩各位

神戸大学風韻会

走馬燈

— 思い出の記 —

今年も風韻会は七名の会員を社会に送り出すことになりました。長くて四年間、短い者では一年間という風韻会生活ですが、その思い出は走馬燈の影絵の如く彼等の胸の中を駆けめぐっているのではないのでしょうか。ここに走馬燈の名の下に、思い出の記を綴ってみました。

雑記

(J) 有田栄一

風韻会に入って、もう四年近くになっている。部活動の中でも、色々と思ひ出深いものがあるが、なんていったって、最初の合宿であらうと思う。中学、高校と色々なクラブ生活を経験したけれども、合宿の経験はなかった。それは吉野の竹林院での合宿が自分にとって最初であった。思い起せば昭和三十七年の七月の中旬であったように思う。長時間の練習、それは、喉の酷使と脚の苦痛に対する忍耐を培かうことである。しかし、それによって、何んらかの新しいものが身についたことと自信をもっている。この苦しい練習を和げてくれたものは、吉野の自然と歴史とであった。

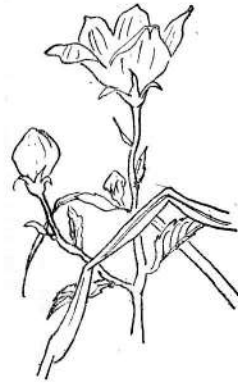
たしか、昼食後、M先輩とS君とで、吉野を散策を試みたことがあった。陽は真夏の太陽、照らす日射は強かった。しかし、さすが

ちどれくらいの人が満足してゆくことだろうか。

世阿弥の頃既に荒れていたという寺も、今や一層荒れている、というよりも昔のなごりをとどめていない。その中でなんとか往時のすがたをと、保存会の人たちが努力している。だが史跡を交に手を加えずに、ただ観光客が喜びさえすればいいというような「保存」にならないように今後も努力していただきたい。

すぐ北側に幅の広い道路がつくられている。西は村にぶつかったままちよん切れている。

保存と建設——いつの世にも、どんな所にもあるものだらうけれどそれに大和を、見るとき、なにかそこに他所とは違って苦惱の色を感ずるのである。大和が、あまりに古い歴史をもったところであり、過去を簡単に捨て切ることができないのであろう。そしてそのことが逆に大和を人々の心のふるさととしているのかもしれない。そしてこの自分も、そんな大和に心をひかれて、今日も訪れ、そしてこの大和の苦悩を胸に残したまま、今大和を去ってゆくのである。



山の上、樹の下を通ると、山の冷気が膚に感じられる。山蔭には、月見草、野薔の花が群草の中でその婀娜を競っていた。途中、数人の佳人に出会った。多分、我々と同じ吉野の持つ古刹を求めてきたのであろう。

彼女達と前後して、目的地の如意輪寺につく。聞けば、その昔、延期年間、日藏道賢の草創によるという。後醍醐天皇が御使用におよんだという茶碗箱を拝観するのに五十円を払ったのは、何かしら矛盾が感じられた。俗世間の臭がここで嗅げたような気がした。又、当寺は、楠木正行と弁内侍の悲しい恋の物語の舞台でもあった。幾百年の昔のことではあるが、人間らしさが感じられて興味がある。正行の歌に、

とても世に永らふべくも

あらぬ身の仮のちぎりをいかで結ばん

平易な歌ながら、死んでいく前にでも、恋の歌を残す心情、昔の人の優麗さがうかがわれる。私もそんな気持ちに打たれたのか、歌を一つ作ってみた。

群草の繁れる間に一人咲く

赤き野薔誰れに見せらむ

もう一つの合宿の楽しみは麻雀がある。最近では部内の麻雀人口は減少したのか、あるいは麻雀をやらなくなったのか知らないが、あまりやらないのであるが、私がまだ二、三年生の頃は、合宿に行くとき、練習の合間合間に雀台にかけ寄ったものであった。麻雀はゲームの面白さに、その打つ方法によって、人の性格が現われそれを観察するのも楽しみである。

豪快な内にも、繊細な手を示すK先輩、口が達者で、言葉で相手
を幻惑してしまうM先輩、信じられぬくらい早く立直をかけて、他
の三人を困らすY君、なきたん専門の私、あまり存在を意識させず
にいて、常に浮いているM君、等各人によって種々様々な麻雀の打
ち方があるが、それは各人の性格の一端を現わすものとして興味深
い。

風韻会生活で得たもの

(E) 大良 晃彦

大学を出てから振り返るならば、大学の思い出は直ちに風韻会に
通ずるものとなるのではなからうかと、それ程に思う程、私の大学
生活に占める風韻会の比重は大きかった。

現在の二、三年生の声を張り上げるだけのいささか乱暴な語や、
おぼつかないスタイルの仕舞を見聞していると、姫路分校で入会
した頃の私の姿を彷彿と思ひ出す。入会したのは大学に入ってから
の四月だったが、その当時は能とか謡曲に対する特殊な関心もな
く、入会の動機もはっきりしたものはいってなかったよう
だ。しかし、考えてみれば、私には生来、古寺をブラついてみたり、
俳句や短歌を中心とする古典文学趣味、あるいは漢学趣味があっ
て、大学に入って何かさうした趣味というか——欲求を満たさうと
して風韻会に入ったようです。あれから四年——いろいろなことが

っている。一、自分の心の底を打ち明け得る友を得たこと。二、ま
がりなりに幹事長という役につき、一つの集団を運営する経験を
持ち得たこと、これは大きい。三、宇治師範、藤井先生はじめ多く
の豊かな人格に接触しえたこと。四、最後に、謡曲にも長足の進歩
を、といたいところだが、これは残念ながらその難しさが判って
くるばかりで、到底自分で満足出来る域ではない。ただ、練習をそ
んなに怠げずにやって来たことと、全くの無から、難しさが解り始
める程度に迄なつたという丈である。でも、これだけでも素晴らしい
事ではないか。私はこんなにも多くのものを風韻会生活より得た。
だが、ここに心残りとなることがある。全学舎統一が間近になった
今日、会の新しい組織化を志向したのだが、私の幹事長時代にはは
んの手がかりを掴んだに過ぎなかつたことである。これは後輩諸君
の積極的な取組に期待します。しかし、ここに一言呈しておきたい
のは、決してサロンのな雰囲気にならずに、常に若々しさと逞しさを
もつ風韻会に育ててほしいということです。あれもこれも、いず
れをとって見ても、私の人生の一時期に——若い、それだけに重要
な一時期に——大きな比重を持った風韻会生活でした。この風韻会
生活は、決して、単なる思い出には了らないことと思ひます。

—1963. 10. 25—

閑 想

(E) 小林 敬三

天地の気を静謐して神靈の降臨を冀うように、地謡方が幽かに謡
う初段の構成に、中世の芸術家の意気地と祈りを見て僕の心は安ら

ありました。姫路分校の学生ホール、「下と書いてあつても音を下
げないのだ。——マァ、声さえしつかり出してくれれば良いさ。」など
といわれながら、先輩の謡うのを、おおむ返しに「それ青陽の……」
と謡った最初の練習。淡路での余りに上品なアダナを付け合つた始
めての合宿。高野山での蚊に悩まされながらの合宿。主催する側に
まわつた吉野での合宿。最上級生として臨んだ京都東寺での、ある
いは摩耶山での合宿。殆んど毎日囁のように続いた五、六月の謡会
、交歓会。「風韻」の編集と寄附金集め。更には三年生の時に迎え
た三十周年大会……等。こんなにまとまつたものでなくても、こ
うして回顧していると苦味を覚える若干の思い出を混えて、種々の
思い出が幾つも幾つも浮んで来る。

だが、考えて見れば、私が風韻会に残したものは少く、風韻会よ
り得たものの方がずっと大きいようである。

二年の後期であつたか——。友達二人と飲みに行つた。六甲おろ
しの厳しさにうち震えながら下宿に帰つたのであるから、十二月頃
であつたらう。二人分の蒲団に三人がもぐり込み、若干の酒の酔い
のままに、政治論・社会論・人生論・恋愛論等々ととりとめなく話し
こんだ。長話がいつのまにか、サークルに所属することの良さを挙
げることになり、その時私は、自分が風韻会に属していることの良
さを述べてこんなことをいつた。謡曲・仕舞を通じて、能という未
知の芸術を、まがりなりに理解しようとしていることの良さ。本
学では前後三、四年にわたつて同窓生の居ない自分の存在が、かな
り多数の人に認められていると意識出来ることの良さ。
あれから更に二年たつた今日では、更に付け加えるべきものを持

ぐ。これは初めて船弁慶を観能した時の感懐であつた。小次郎信光
が始祖世阿弥の花伝の教えを展開させ実践した作品の作法と構成の
厳しさと、彼等の芸術至上主義、「美」への渴望を実現する最少
不可欠の基盤であつて鍛練の諧調はあれ程深い感動を呼びおこして
くれた。僕の感激、驚き、安堵はこんなにも大きい。あの軽快と壮
重、優美な象徴性に日本文化の光彩を見る。日本の大地に生を享け
た華。能はそのかみ生まれた。南北朝の斗乱が漸く鎮まつたとき、
上下は乱世が忘れていた美を要求し、水清き都に花の御所を営んだ
義満も武家の先導に係る文化を創造賞翫する余裕と心算があつた。
その結果能が、上下の要求の結晶として出現し、民衆の熱狂を買つ
たが芸術の成功は義教の憎む所となつて世阿弥は流謫される。秀吉
が利久に鞞腹を切らせ得ても茶の湯を抹殺はできなかったように、
能も亡びず、徳川三百年の式楽として庇護されて隆盛した。正に人
を魅了する芸術の強靱さを確認するが、能的、換言すれば武家的と
もいえる精神（福沢諭吉の言葉を借りれば瘦我慢的土風）が日本人
の頭脳中で大きなウエイトを占めなくなつた現在、能はその支持の
基盤をどこにもとめうるのであろうか。昭和二十年を境に、日本の
古代的伝統精神と近代的西洋精神の均衡は破れ、後者が決定的に、
日本人の思考様式を支配することを始めた。新世代の日本人のどれ
程が能の精神、歓喜、能の静寂を理解し、要求するのであろうか。
心配される。民衆が要求を熄めた文化は残存し得ない。然し能が衰
微する事は大なる損失である。この精神的豊醇さは現代の文化に継
承せしめる価値と必要があることを信じている。能は今、その中世
の現代文化に対する可能性を試みようとしているのである。

僕達の風韻会は「文化クラブ」である。然しながら僕はこの会における生活で、どの糸をたぐってみても文化を論じた想い出が、でてこないのをさみしく思う。好きだから謡うのだ、能的謡曲的ムードに酔いしれて、青春の感激に涙するのだ、要は我武者羅に没入して技術の練磨をはかるのみだ、なにを論ずる必要があるというものがあれば僕はもはやなにをいおう。ただ技術なるものが、決して僕達をより緊密に結びつけてくれるエーテルとならず、かえって孤高の高慢を築きあげるために役立ったのみではなかったかと恐れる。僕達は真理の学徒、文化の創造者である。文化を論ぜず、ムードにむせぶのは憎落であると呼びえないであろうか。ともかくも謡は趣味であつて、好趣味は人生の至宝である。しかしながら、趣味から文化の大流へ連なる運河を開鑿しないことは、愛して否定することといえないだろうか。このいい方をするのは風韻会をこよなく愛しているからである。ただただ、後輩諸君の豊かな友愛と、風韻会の構造的発展を希望するのみである。

書生二年

(E) 久世 武夫

謡をはじめて、ようやく半年になんなんとするばかりの私に、謡についてのそれほどの想い出があるはずもなく、また私より謡曲歴のはるかに長い面々を前に、とかく云々する資格もないと思われ

るので、私の個人生活の面、特に、大学生活の大半を占めた書生生活を中心とする想い出の記とすることを許していただきたい。

私が住吉川沿いの屋敷に書生として入りこんだのは、三年の春であるが、それまでは、下宿を転々とし、姫路の一年半の間に、最初の二食付きの下宿には一カ月ばかり、次の間借りの下宿では五カ月、そして、姫路での最後の下宿は、テニスコートのすぐ近くで、床の間つきの八畳に一人、風呂付きで月一八〇〇円という条件の良きで、すっかり気に入って、一年間は、ここを根拠地に、テニスに明け暮れたものであった。

ところが、六甲に来てはじめての下宿は、三疊、北窓で光も入らず、主人夫婦が新興宗教に熱心で、すぐ隣の部屋で、朝は朝で早くから、夜は夜で遅くまで、派手な祈祷の毎日、おまけに思いもかけない南京虫というやつに見舞われ、すっかり神経をいらだたされ、あぐくは、試験の直前に流感にやられ、良き思い出を一つも残さずに試験終了後、這々の態で宿を抜け出し、現在の書生稼業を、先輩より譲受けたというわけである。

書生をはじめるとしては、それなりの覚悟をしてはいたものの、時間的、精神的な束縛から、耐えがたいものを感じることも度々であった、しかし、反面、それから与えられるものも大であったのは言うまでもない。

大学生活の後半二年間を奨学金だけで、家からの仕送りらしいものを殆んど必要とせずに過ごせたのは、最大の恩典であった。そうした経済面以外にも、それまで殆んど関知しなかった上流社会の生活の一面もある程度理解できたし、種々の制約の内、如何にし

て自由を見出すかという面で、かなりの自己訓練ができたようにも思える。懸賞論文に応募しはじめたのも、書生生活をはじめてからであり、不自由の内、精一杯、自由に生きる技術を習得できたとも言えよう。

こうした書生生活にもエピソードがある。一、二ひろってみると、銀行へ預金の引出しを頼まれて行く途中、寄り道して、一時間ばかりして、のこのこ出かけたところ、下宿で心配して、銀行へ電話がかかってきていたということである。思うに、一〇〇万もの大金の預け入れられている通帳を持逃げたのではないかとみられたのであろう。

こんなこともあった。母子連れで遊びに来た子供の遊び相手を言いつけられたが、子供の喜ぶことは、大人も同様で、模範の組み立てなるものは、大人でも大いに楽しませるもので、肝心の子供はそっちのけで組立てに熱中、仕方なしとみてか、子供は母親のもので駄々をこねていた。こちらも、やっと仕上げたものの、数日というものの、肩の凝りに悩まされたのである。

以上のような書生生活を送るうちに、ジュニアからシニアに移って以来、テニスも余りやらなくなり、体の調子が気になり出したが、特に、胃腸の不調が度合をまし、就職試験を前にした四年の四月はじめに、恩師藤井教授に相談したところ、たちどころに、「騙されたと思って、謡をはじめてみる」と勧められ、時間的な面で続くかどうか心配しながらも、入会したのが四月のことであった。現在もそうであるが、節まわしも、声の出し方も、おおよそ謡といえたものではなかったが、煙たがりもせず手とり足をとりにして教え

てくれる三、四年の諸君について語っている間に、不思議と、胃腸の調子も落着いたように思えたのである。ところが、懸賞論文の締切り、就職とかで部屋通いより遠ざかると、再び不調となり、改めて、謡うことの必要性を痛感したのであった。

謡についての私のような見方は、邪道であるかもしれないが、必要から出たことは永続するとか、当分、諸君の足手まといになるかもしれないが、私なりに、風韻会生活を楽しませていただくつもりであり、また、健康のためにも、謡を一生の伴侶としたいものと思っている。

終りに、新参の分際で、厚かましい四年生であったことを謝して結びとしたい。

謡と私

(B) 松尾 敏弘

私が風韻会に入部したのは、確か、大学一年、それも比較的初期であったと思う。それから考えると謡というものに、なじみを持ち始めて今年で四年目になる。普通、四年目位になると謡というものは、少なくとも入口は、のぞき見ることが出来るようになるだろうと思われのであるが、やんぬるかな、幽霊部員の名高き私には、今日ですら、尚、その入口をも、垣間見る事が出来ないものである。常日頃、練習を escape する私にとって、それはむしろ当然す

ざる程当然であると云ってしまえば、それまでであるが、併し何ん
と云っても一抹の寂しさを感じざるを得ない。

それでも大学入学以来、勉強らしい勉強もせず不善ばかりをな
し、また学んで来た私にとって理解するや否やとは別問題として、風
韻会に入っていたのがせめてもの慰めごとであり、顧みるに風韻会
に入っていてつくづく良かったと思うのである。

大きな表現かも知れないが、多感な青春時代の最中に存する大学
生活に於いて、風韻会を通じて、謡というものに接し得たこと、ま
た良き先輩諸氏、同輩、後輩諸連を知り得たことが、爾後の私にとっ
て何んらかの形で大きなプラスになると信じている。

私は玉突き、ダンスなどもやり、また酒を飲んで騒ぐのが好きで
ある。そして友人に謡のクラブに入っていると云うと、「柄にもな
い」と言われてよく笑われる。併しはつきり云って私と謡との関係
は不即不離の関係にあるのではないかと思っている。和辻哲郎では
ないが、私は古寺を巡るのが好きでよく京都に行く。静と動の違い
はあっても、古寺（特に庭）そして謡の中に感じるものには、何か
共通点……日本特有の「わび」「さび」あるいは「枯淡」などと
いうものが、えいえいと脈うって流れているように思われてならな
いのである。それらは西洋文明のみに汎濫している今日、日本固
有の文明に対する郷愁とも形容すべき、少なくとも私の潜在的意識
を十分に満足せしめてくれるように思われるのである。

住友機械に就職も決まり、後、数ヶ月で、愈々一個の社会人にな
るのであるが、私と謡とのこの関係は今後も続けて行く心算で居り
ます。

思いにまかせて

(P) 佐々木肇宏

風韻会に所属して四年目、早いものだと思う。友人の大畑君に勧
められたのが動機になった。兎に角部屋へと言うことであの食堂二
階の畳の間に案内されたのである。そして早速初稽古となった。彼
から「腹に力、精一杯の声で」との指示を賜り「鶴亀」の謡本を前
に正座。「それ青陽の……」と謡い始めるも自分の意気込みとは
裏腹に、力む程に声は掠れ、息切れ激しく意に反すること甚しかっ
たのを覚えております。けれども謡曲をして自分にもやれそうなの
能性が見出せた事はある意味で一入の喜びを感じぬわけにはゆか
なかった。何を隠そう天才的な音痴を自ら認めざるを得ない小生は頑
迷なる劣等感を帯するに及んで音楽スルことの喜びを味った事な
い不幸者(？)であったのです。謡曲を謡うことを音楽スルとは言
い難いかも知れないが音楽的なものに触れ得ることの可能性の芽生
えだけでうれしかったのである。ナントモ恐縮ナシダイデハ有りマ
ス。入部以来和気合々たる毎日の練習や都留先生を囲んでの週一度
の放課後の稽古では、全員打ち揃って黄昏の影濃き学舎の静寂をば
その高吟で打砕く快を味わうこと度重るに及び、謡曲への親しみは
一に増していったのである。

この如くジュニア時代風韻会を通じて謡曲を知りサークル活動の
良きを知り得た私はシニア進学後も是非当サークルを続けたい気持
になつて来た。教育学部所属の私には本学舎が六甲台の風韻会本部

風韻会生活を

顧みて思うこと

(J) 山本 正人

と離れているため授業等の関係から時間的制約を受けることは予想
できた。しかしながら謡曲を謡いたい望みとその限りではサークル
参加が技術面のプラス以外の α なる何物かを掴みうるよすがを提供
してくれるものと考えたのであったので一週一度と雖も六甲台へ足
を伸ばすことをよしとしたのであります。けれども六甲風韻会は六
甲三学部を中心として発展して来ただけに他学部から足を運ぶ者に
取っては不都合な面も少なくなかった。練習時間の取り方などその
一例でありました。練習のケヂメが不明瞭でせっかく練習に参加す
るつもりが徒勞に終ることもままありました。期待が大きかっただ
けにこうした矛盾は精神的動揺を禁じ得なかつたのです。それがひ
いてはサークル参加への消極的な態度となつて表われて来たことも
否めなかつたと思うのです。しかしその原因は意に添わぬ事実だけ
に有つたのか？思うに話し合いの場としてのサークルの位置を見失
っていたのであります。謡のみに専念できる既成の完成されたもの
を望んでいたのだと思います。サークルは参加者がより良きものへ
と創りあげてゆくもので、己れもその一員なのであります。この観
点からして菌茸い思いを免れ得ないものであります。初期の意志も
この意識あつて真に自分のものとなるのだと考えるしだいなので
す。ともあれ学舎統合の実現の際、風韻会参加者も全学部にわたる
ことと思ひます。全学の学友諸君が風韻会で謡い語り合い高度で健
全な human relation を創りあげてゆくことを真に期待するもの
であります。後輩諸君の健闘を祈ります。

尚、宇治先生始め幹事大良、幹部役員諸君の並々ならぬ御尽力に
紙面をかりて感謝の意を表したいと思ひます。

私が風韻会の門を敲いたのは、入学一ヶ月後のことであつた。入
部の動機はこれといって取り上げることもない。唯、日本芸能の最
たる能にいきさかの興味を抱いていたからに過ぎない。文化活動の
何たるかを究明しようという気もさらさらなかつたのである。従つ
て、私の謡を習う態度に真剣味の欠けていたことも否定出来ない。
技術的進歩が遅々としていたことがそれを如実に物語っていた。こ
うした真剣味の欠如の原因が何処にあつたかを探ってみる必要があ
る。当時の私は、団体生活の中に自己を見い出そうとする努力を払
わず、その無意味であるの知らずに、ただいたずらに己を大事に
することに窮々としていた。風韻会を自分の生活の軸にすることな
く、自己中心の生活をしていたのである。謡を何がなんでも会得し
てやろうという確固たる信念を持っていたわけでもないから、日常
のクラブに於ける生活を自分の生活であると考えなかつた私には、
謡に対する真剣さというものを望むべくもなかつたのである。いい
かえるなら、謡に燃えるが如き情熱を抱いているならまだしも、風
韻会に於る人間関係にすら興味を抱いていないことにその原因があ
つたといえる。こうした私に破綻の生じるのは時間の問題でしかな

かった。

私は一度ならず二度までも退部を決意した。それは、自分が風韻会に溶け込む努力をせずに、利己的な考え方をしていたからである。打ち明けて言えば「風韻会のためについてやす時時間を勉学にふり向けるなら、現在の悪しき成績もさぞかし良くなるだろう。」などと考えたからである。その時自分が退部すれば、風韻会に何らかの支障を来たすのではないかなど全く考えなかった。それ程に自分は風韻会にとって必要であるとも考えなかったし又、考える余裕もなかった。しかし退部届が受理されずにつつかえされると、さすがに万感去来し、しばし言う言葉が知らなかった。風韻会の人間関係に興味を抱き始めている自分に気が急に友達を失うことが恐ろしくなったのである。風韻会を去ることは、我が最良の友と思うDを失うことを意味した。自分は既に風韻会を構成する人間であり、歯車であり、風韻会なくしては生きられない（ちよっとオーバーかな）であると悟ったのである。謡は他所でも練習出来るが、風韻会に於けるヒューマンリレーションは風韻会にしか存在しない。その人間関係に私は引き戻されたのである。サークルに於ける本来の活動たる文化活動に魅力を感じたのでなく、それをおし進める段階に於て生じる人間関係に魅せられたのである。サークル活動の本質たるものより、副次的であると考えられる人間関係に魅力を感じたといえれば、嘆息をもらされる向きもあろうが、そうした人間関係はその中に莫大なエネルギーを生み出すものなのである。従ってこうした、一見本末転倒的な私の態度もあながち否定されることもないであろうと思うのである。文化価値追求あるいはサークル活動の本質を究め

んとする努力は勿論必要であり疑う余地のないところであるが、それ一本でサークルを運営して行こうとするならば、かつての私の如き態度で居る者を永く風韻会に留めておくことは出来ない。それ故に、潤滑油的存在の人間関係というものを重視する必要が生れてくるのであって、又、その人間関係にのみひかれたサークル員が存在することもあながち否定すべきものでもなからう。我々人間は常に進歩するものである限り、彼らもその態度により高次のものを示すようになるものと思うからである。よりすぐれた文化価値追求を行おうとするためにはその基礎となるべき、換言すればその力を育成する人間関係を、改めて見なおす必要があるのではないか？
更に女子部員の存在をみる現在の風韻会に於ては、過去の風韻会とは異った人間関係というものが生れる可能性もあり、従来通りの観念では、それを律することは出来なくなるのではなからうか？
以上、駄文ながら思いつくままに記しましたが、意のあるところを汲んで頂きたい。
(一九六三・十・三十一)



昭和三十八年度風韻会活動総括

三十八年度は、工学部、御影分校の鶴甲移転に始まる学舎統合の結果として当然予想される風韻会の質的变化に対する順応への第一歩を踏み出した年として、神戸大学風韻会にとっては記念すべき年であった。

三月

二十四日(日) 卒業生歓迎会

於六甲台学生集会所

桜の蕾もふくらむ一日、十一回生十五名を送り出した。「素謡14番、独吟1番」宇治師範、藤井、荒川、米花、福光の四顧問。西尾(旧5)、原(B9) 福田(E9) 山崎(E9) 左鴻(E10) 中島(E10) の六先輩。

二十七日(水) 三十一日(日) 春季強化合宿

於京都東寺

参加者は姫路分校会員も含めて現役十九名、原(B9) 前田(E11) 井上(E11) 森沢(J11) の4先輩。

ハード・トレーニングではあったが和やかな雰囲気があった。練習曲「鞍馬天狗」「百萬」「三井寺」「放下僧」「屋島」「頼政」「竹生鳥」以上七番

五月

三日(金) 第七回三大学合同謡曲大会

於大阪波多野舞台

今回は大阪市大が主催校であった。舞台が少々狭かったが盛会であったし、会後のミーティングに於ても交歓の意義を大いに發揮した。

素「百萬」(シテ池尻康則ツレ武田良弘ワキ黒田昌吾)。仕「竹生鳥」(尾上裕美)。「田村」(近藤哲久)。「吉野天人」(長谷川晴美)。「草子洗小町」(戸次威左武)。「天鼓」(大良晃彦)。合同素「富士太鼓」(シテ大良晃彦)。連吟「花筐」。先輩連吟「熊野」原(B9) 上野山(E9) 永田(J10) 前田(E11) 井上(E11) 植杉浩(E11) 大西(E11) 形部(E11) 松原(E11) 以上九先輩が参加された。

五日(日) 宇治風韻会

於大槻能楽堂

有志十名が参加。

十二日(日) 宇治風韻会

於大槻能楽堂

有志数名参加。

十二日(日) 大学祭園遊会模擬店「狸々」開店。

於六甲台学舎キャンパス

昨年度の苦い経験を反省し、今回は別記の如き優秀な結果を得

た。また昨年に引き続き衛生、品質、経営方針第一位の賞状を獲得した。明年度も公私を明確に分離した経営が必要であろう。

十四日(火)文化サークル合同発表会

於国際会館

連吟「花筐」

二十六日(日)第4回神戸女子薬科大学謡曲 風韻会交歓会

於兵庫県歯科医師会館

素「嵐山」(シテ山本正人ツレ段野治雄ワキ武田良弘)「俊成忠度」(シテ黒田昌吾ツレ久世武夫トモ織田信夫ワキ金子智一)。
連「熊野」。「花筐」。仕「田村」(近藤哲久)「草子洗小町」(戸次威左武)「吉野天人」(長谷川晴美)「鶴亀」(武田良弘)。前田(E11)先輩が参加された。

六月

八日(土)関西学生能楽連盟春季大会

於山本能楽堂

素「俊成忠度」(シテ松尾敏弘ツレ有田栄一トモ金子智一ワキ段野治雄)。「連吟」花筐。仕「鶴亀」(武田良弘)「屋島」(大良晃彦)「田村」(戸次威左武)「羽衣」(長谷川晴美)「草子洗小町」(近藤哲久)

十六日(日)神戸大学風韻会春季大会

於姫路分校ホール

来年には学舎統合の一環として当分校が廃校される運命にあり、都留好子先生を交えての姫路での会はこれが最後となった。

長い間の御指導を感謝するとともに、今後の先生のより一層の御活躍を御祈り致します。

素謡(8番)連吟(1番)仕舞(12番)

二十三日(日)宇治風韻会

於宝塚植物園内茶席

有志十名参加。

三十日(日)奈良女子大学観世会 風韻会交歓会

於兵庫県社会事業会館

当方の出席者は少なかったが謡会、交歓会ともに成功裡に終わった。

素「熊野」(シテ大良晃彦ツレ段野治雄ワキ武田良弘ワキ、ツレ小林敬三)「鉄輪」(シテ戸次威左武ツレ金子智一ワキ近藤哲久)。
連「花筐」。仕「紅葉狩」(杉岡八千代)「羽衣」(長谷川晴美)「吉野天人」(武田良弘)「田村」(戸次威左武)「草子洗小町」(近藤哲久)「井筒」(大良晃彦)

七月

十一日(木)十三日(土)文化総部リーダートレーニング

於芦屋ユースホステル

近藤(B13)金子(E13)五十嵐(B14)の三名が参加した。

八月

二十六日(月)九月一日(日)夏季強化合宿

於摩耶山天上寺

女子会員七名を含め三十五名が参加し、技倆の向上と会員相互、先輩との親睦に効果をあげた。今年はず治師範にも一日参加を頂き、「巴」及びコンクール曲「紅葉狩」を御指導下さった。また、原(B9)福田(E9)中島(E10)前田(E11)井上(E11)形部(E11)和田(P11)の七先輩が参加された。

練習曲「熊野」「巴」「三井寺」「天鼓」「俊成忠度」「賀茂」「巻絹」「船弁慶」「吉野天人」「鞍馬天狗」「百萬」の十一番

十月

二十日(日)第一回観能会

於湊川神社能舞台

「竜田」「井筒」「景清」「鶴」の4番。

終了後、シニア課程に進級した二年生のための歓迎を兼ねた会食をした。参加者二十三名。

十一月

十六日(土)神戸大学風韻会秋季大会

於六甲台学生集会所

二十日(水)第二回「天鼓」観能会

於大槻風楽堂

二十四日(日)奈良女子大学観世会 風韻会合同発表会

於東大寺本坊

十二月

一日(日)宇治風韻会

於湊川神社

十五日(日)関西学生能楽連盟秋季大会

於大槻能楽堂

附、連吟コンクール(作曲「紅葉狩」)

二十二日(日)三十八年度風韻会謡納会

於学生集会所

本年度練習曲は次の通り

「熊野」「山姥」「花月」「咸陽宮」「女郎花」「放下僧」「鉄輪」「車僧」「俊成忠度」「紅葉狩」

以上十一番

編集後記

じく一九六三年度号と記しました。

編集委員

大良 晃彦

山本 正人

近藤 哲久

黒田 昌吾

戸次 威左武

★また、従来は本誌発行前に御寄附を仰いでまいりましたが、今号からは本誌と引換え(㊦)といった形で御寄付をお願いすることになりました。この方が資金量も増大し赤字を出すといった結果にはならないだろうとの皮算用でございます。

★我が風韻会は、昨年度輝かしい三十周年を迎えて、新しい発展へと歩を進めました。今年度の風韻会は、一口でいえば、地道ながらも新しい風韻会の姿を求めている模索の時期であったといえましょう。たとえれば、ともすればマンネリ化しがちな風韻会の現状に対して反省の声が挙り、種々の論議が興りました。そこで今号は、こうした面を共同研究として発表してみました。

★原稿の面につきましては当初の編集方針は、少くとも紙面の五割は先輩諸氏の原稿をと思っていたのですが実現出来ませんでした。編集子の努力不足をお詫び致しますとともに第五号への先輩各位の御協力をお願い致します。

★皆様の手三十周年記念号をお届けしましたのは今年の三月でした。ところが十二月迄の方が学生は動きやすいので、今号からは年内発行に踏切ることになりました。本年は同一年度内に二回発行されることになり、本号は第四号とはいえ、表紙には同

★最後になりましたが、「風韻」第四号発行にあたりまして、種々御支援を賜わりました皆様に深く御礼申し上げます。

(大良)

昭和三十八年十二月十三日印刷
昭和三十八年十二月十五日発行

神戸市灘区六甲台町

発行所 神戸大学 風韻会

印刷所 水三島紙工株式会社

電話大阪 931 六七四八番